《書　　評》

Peter Heather, *Rome Resurgent: War and Empire in the Age of Justinian*

Oxford University Press, Oxford, 2018, pp.viii + 393

西　村　昌　洋

古代ローマ史の研究者なら既に Peter Heather の名をご存知の方も多いだろう。彼はオックスフォード大学出身の歴史学者であり、現在はキングズ・カレッジ・ロンドンの中世史の教授である。彼が元々専門にしていたのはゴート族であり、その後、2005 年には『ローマ帝国の滅亡（*The Fall of the Roman Empire*）』を公刊している。2005 年の著書に関しては日本でも書評が出ており[1)]、特にローマ帝国の衰亡をめぐる論争においては衰亡論再興派の論客の一人として位置づけられている[2)]。その Heather が 2018 年に公刊したのが、本稿で取り上げる『よみがえるローマ：ユスティニアヌスの時代における戦争と帝国』であり、現時点で彼の最新作である。なお、本書は「古代世界における戦争と文明（Ancient Warfare and Civilization）」シリーズの一冊として出版されている。タイトルが示す通り、今回 Heather が検討するのはユスティニアヌスの治世と彼が行なった「再征服戦争」である。本書の内容を検討する前に、まずは章題と各節の小見出しをすべて日本語に直して提示しておこう。

はじめに：ユスティニアヌスと東ローマの没落
　――皇帝と歴史家
第 1 章：「このしるしによりて汝勝て」
　――イデオロギーと帝国、勝利をめぐる政策
第 2 章：軍事－財政複合体
　――帝国の兵力、巨大な金食い虫
第 3 章：コンスタンティノープルの政権交代
　――アナスタシウスの失敗、「緋色の死」
第 4 章：最後のいちかばちかの賭け
　――神の威信によりて、東方での戦争、ニカの乱、一路西へ
第 5 章：五千の騎兵
　――ヴァンダル族とアラン族の王、ヴァンダル族の撃滅
第 6 章：ローマとラヴェンナ

――パトリキウスのペトロス、「唯一の帝国の似姿」、フラミニア街道
第 7 章：勝利をめぐる文化
――法の全体系、「ソロモンよ、余は汝を超えり」、神の平和
第 8 章：「神における我らが兄弟」
――降り立った鷲、アレクサンドロスの門、我らが時代の平和
第 9 章：叛徒たち
――皇帝たること十年、ゴート人トティラ
第 10 章：ユスティニアヌスの西帝国
――三章問題、地政学とバルカン半島、総督府、スペインの城砦
第 11 章：東帝国の没落
――イスラム圏の（衛星）国家、中核地帯の喪失、ユスティニアヌスと帝国の戦略

ここからは、本書の内容を整理してまとめていこう。「はじめに」の部分で Heather は、本書が以下の二点への回答を目指していることを明らかにする。まず、ユスティニアヌスは西方旧領を奪還することで古代ローマ帝国の威信を取り戻すという野望に憑りつかれた男だったのか。そして、この再征服戦争が東帝国に深刻な負担を課し国力を損なわせた結果、アラブ・コンクエスト時代の大規模な領土喪失の原因になったというのは本当か、である。どちらも、ユスティニアヌスの治世とその結果に関する、一般的で伝統的な見解である。Heather はこの点にどう答え、これに代わるどのようなユスティニアヌス像を描いているのだろうか。同時に、Heather はここで資料の問題にも言及している。ユスティニアヌス時代の第一級の資料といえば、当然プロコピオスである。ただプロコピオスは、『戦史』ではユスティニアヌスの偉業を褒め称えているのに、『秘史』ではユスティニアヌス（および彼の妃テオドラ）をこきおろしていることで知られる。同じ皇帝に対してこうも正反対の報告を伝えるような歴史家の発言は、史料として信用できるのだろうか。これに対する Heather の見解は以下のとおりである。自分が授業中に『秘史』におけるテオドラの描写の話をすると、たいていの学生は笑う。おそらくプロコピオスも読者に同じ反応を期待していたのだろう。プロコピオスはユスティニアヌス政権の建前と実態の乖離を浮き彫りにすることで、読者と戯れているのである。だが、だからといって、『戦史』における詳細な記述が信用できないとか価値がないということにはならない。『戦史』の想定される読者はおそらく皇帝本人である。したがって、内容は正直ではないが、あからさまな虚偽を混入することもできない。『戦史』と『秘史』は、執筆の目的と環境が別である。だから、プロコピオスの発言を厳密に検証する必要はあるが、歴史家・作家としての誠実さまでを疑う必要はないのである。この点を確認した上で Heather は本論に移る。

本論のうち、第 1 章から第 3 章まではユスティニアヌスの時代に至るまでの前置きにあたり、第 4 章から第 9 章までがユスティニアヌスの治世を扱う。第 10 章と第 11 章はまとめ・

結論として機能している。第1章は後期ローマ帝国のイデオロギーを問題にしている。キリスト教化した後期ローマ帝国はキリスト教と文明を守るために存在する神に嘉された帝国である。その皇帝はこのイデオロギーを守り体現する存在でなければならない。特に重要なのは戦争に勝つことである。戦争での成功は皇帝が唯一絶対の神の加護を受けていることの証しであり、逆に失敗は皇帝の正統性を大きく傷つけ、内紛と簒奪の危険を高めることで政権を揺るがせる。この点はユスティニアヌスの治世を考える際に、覚えておくべき前提・後景である。第2章は、その戦争を遂行する後期ローマ軍の組織構成と性質、そして、その軍を支える行財政組織について説明している。2005年の著書でもそうだったが、Heatherはこの点に関して後期帝国は上手く機能していたと見ており、帝国内部の制度や組織に関してはかなり肯定的な評価を下している。第3章はユスティニアヌス即位前の時代、アナスタシウスとユスティヌス1世の時代を扱っており、特に後継者問題と連動して発生した上層部内での勢力争い・権力闘争に焦点を当てている。

第4章以下がユスティニアヌスの時代の説明にあたる。ユスティニアヌス治世初期は風向きがよくなかった。ササン朝ペルシアに対して強硬路線をとったことは裏目に出ていたし、ニカの乱とその鎮圧はユスティニアヌスの皇帝としての資質と正統性を疑わせるに十分である。Heatherが言うには、こうした背景の中で再征服政策は徐々に姿を現わしていったのである。再征服は、ユスティニアヌスがずっと以前から温めていた宿願ではなく、東方や首都での失策を埋め合わせることを目的に、ヴァンダル王国内部での情勢の変化に便乗する形で、徐々に、予期せぬ形で、政策として浮上したのである。第5章では、ヴァンダル族の北アフリカへの移動とヴァンダル王国の内情についてまとめた上で、ベリサリオスによるヴァンダル戦争の経緯が語られる。この戦争の成功は、ヴァンダル側の艦隊がサルディニアに出払っていたために、期せずして東ローマ軍が北アフリカに無傷で上陸する機会がもたらされたことによる。また、東ローマ軍の弓騎兵を主力とする戦術に槍騎兵を主軸とするヴァンダル軍が対応できなかったことも理由だという。この戦争の結果ヴァンダル族は、戦死するかあるいは戦争後に異邦の地へ移送されるかして、社会－政治的な集団としてはほぼ完全に解体・消滅した。重要なのは、これが入念に計画された政策の一部ではなく、その時の情勢によってもたらされた予期せぬ大成功だったことである。

北アフリカでの望外の成功に気をよくしたユスティニアヌスは、イタリアの東ゴート王国内部での政情不安を見て、ゴート族もヴァンダル族と同様に征服可能と踏んだ。この時点でユスティニアヌスの再征服政策は完全な形で姿を現わしたのだと、Heatherは考えている。第6章は、定着後の東ゴート王国の内実についてまとめた上で、イタリア半島でのゴート戦争の説明に入る。東ローマ軍と東ゴート軍の戦いはフラミニア街道沿いの各拠点をめぐって展開されるが、最終的に、東ゴート王ウィティギスがベリサリオスを西皇帝位につけるという約束をし、この約束をベリサリオスが受け容れたふりをしてラヴェンナに入城することで一旦幕を閉じる。

第7章では、法資料編纂事業、ハギア・ソフィア再建、東帝国内の教義問題が、上記のようなアフリカ・イタリアでの軍事的成功という文脈に照らして説明される。だが540年代には再びササン朝ペルシアとの関係が悪化し、東方での戦争が再開された。第8章は東方問題を検討している。ペルシア王ホスロー1世はシリア属州への大規模な攻勢を仕掛ける。そして、ローマ－ペルシア間の緩衝地帯であった黒海東岸のラジカ地方をめぐって、ローマ軍とペルシア軍の戦いが始まる。この戦いはローマ領シリアに深刻な被害をもたらしたし、東方に兵力を割いたことが、西方の再征服地での事後処理を手間取らせることになった。

北アフリカとイタリアでの事後処理を扱うのが第9章となる。北アフリカではヴァンダル族残党と土着のベルベル系部族が結託して東ローマへの抵抗を続けていたが、540年代末までには鎮定され、北アフリカは東帝国領に編入された。他方イタリアの東ゴート族は、ヴァンダル族のように大規模な戦闘によって撃破されたわけではなかったので、まだかなりの兵力を残していた。そして自分たちがベリサリオスに謀られたことを悟ると、トティラを新たな王に担ぎ出し、東ローマとの戦いを再開した。東方でのペルシアとの戦争に兵力を割かねばならなかったユスティニアヌスは当初イタリアに十分な資源を振り分けることができず、これがイタリアでの戦いを長引かせた。だが、東方情勢が徐々に落ち着きを取り戻すにつれ、ユスティニアヌスは余剰の戦力をイタリアに送ることができるようになり、ナルセス率いる増強された東ローマ軍の前にトティラとテヤスのゴート族は敗れた。こうして東ゴートの抵抗は鎮圧され、ヴァンダル族同様に、東ゴート族は軍事・政治上の勢力としては壊滅させられた。

Heatherは第10章以下でユスティニアヌス治世の総決算を試みる。彼が言うには、ユスティニアヌスはローマ帝国に過去の栄光を取り戻させようという夢想に憑りつかれた男ではない。現実はもっと味気ないものである。西方の再征服は皇帝としての体面を保つための賭けとして始まったもので、これが政策として現実味を帯びたのは東ローマ軍の戦術と武装が予想以上の優位をもたらすことが明らかになってからである。では、ユスティニアヌスの再征服戦争は本当に東帝国を疲弊させたのだろうか。まずHeatherは征服後の西方領土の状態を検討する。北アフリカに関してはかなりの程度繁栄を取り戻したと彼は考えており、北イタリアは間もなくランゴバルト族の手に落ちるが、南イタリアに関してはそれなりに復興したという。経済的に言えば、東ローマ領に復帰した地域は、それ以外の西帝国旧領と比べればかなりの程度良好な状態を保ったのである。こうした再征服地域が失われるのはもっと後になってからであり、それまでに得ることのできた税収は征服に要した費用と比べても十分元が取れるものだったとHeatherは述べている。西方領土の喪失は、ペルシア人、アラブ人、アヴァール族のような外部勢力の圧迫の結果、連鎖反応として生じたのであり、原因は再征服戦争自体に内在しているわけではない。圧迫が加えられている地域に帝国が兵力を投入できる限り問題は解決できるのであって、解決不能に陥るのは、複数の地域に同時に十分な資源を割くことができない場合か、そもそも動員できる資源の総量が減少・枯渇している

場合か、である。Heather の意見では、ユスティニアヌスの再征服政策は現実離れした夢想ではないし、割に合わない国力の無駄使いでもないのである。

最後の第 11 章は、ユスティニアヌスの再征服は 7 世紀の領土喪失の原因となったか、という問いを検討している。Heather の考えでは、ユスティニアヌスの再征服戦争は東帝国の国力を大きく損なわせてはいない。東帝国中核地帯の農業生産はなおも繁栄を保っている。これを損なわせたのは、ユスティニアヌス以後の時代の皇帝たちが行なったペルシアとの長期にわたる紛争である。このペルシアとの戦いが東帝国（およびペルシア）の中核地帯を荒廃させ、両国を弱体化させた。これがアラブ・コンクエストを可能にしたのである。したがって、東帝国没落の直接的な責任はユスティニアヌスではなく後継者のユスティヌス 2 世やマウリキウスが行なった政策判断にある。ユスティニアヌスの再征服戦争は入念に計画された戦略でも夢想家の悲願でもなく、皇帝としての体面と地位を守るために取られたその場その場の対応と決定の結果なのである。Heather の描くユスティニアヌスは、絶対的な権力を持ちながらもいつ威信と生命を失うことになるかわからない環境の中で、帝位を守るために考えをめぐらし様々な方策を講じる一人の皇帝である。ユスティニアヌスに責任があるとすれば、それは、西方領土の奪還という予期せぬ偉業を達成したことによって、後継皇帝が乗り越えるべきハードルを引き上げ、後に東帝国の没落を招く原因となる長期的で冒険的な対外政策に後継者を乗り出させてしまった点にある、と。

以上が本書の内容のまとめである。ここからは評者が気づいた点について述べていく。まず指摘しておくべきは、本書のユスティニアヌス像は近年の研究動向を念頭において理解すべきということである。というのも、近年、一部の研究者、特に古代末期学の系譜に属する研究者たちは、ユスティニアヌスおよび特にその再征服戦争に対して好意的ではないからである[3)]。彼らからすると、ユスティニアヌスの再征服戦争は、ヴァンダル族やゴート族のようなローマ世界への新たな参入者たちの入植後の歩みと努力を否定するものであり、形成されつつあったポスト・ローマ時代の新しい社会の発展と可能性を破壊してしまったのである。ユスティニアヌスはあたかも古代末期における最大の（もしかすると唯一の）悪役であるかのような立ち位置を与えられている。当然、彼の再征服政策も歴史的偉業というよりは、新しい時代の到来を理解できない時代錯誤の保守反動とみなされることになる。こうした理解の背景に、グローバル主義や多文化主義のような現代世界の価値観・思想信条が作用していることは想像に難くない。こうした立場から見れば、ユスティニアヌスは「移民の敵」、「多文化共生の破壊者」なのかもしれない。

Heather は本書において、こうした研究者に名指しで言及こそしていないが、評者が推測するに、本書はこうした少々偏りすぎた研究動向に対する Heather なりの応答ないし処方箋なのではないだろうか。同時代の文脈に即してユスティニアヌスを評価し直してはどうか、と。これまでの彼の研究から判断しても、Heather は古代末期研究の姿勢や方向性に対して

は批判的・懐疑的な立場をとっているため、評者の推測もそこまで的外れではあるまい。評者自身、やはり古代末期研究者は現代的な関心や政治的な意図を歴史研究に過度に持ち込みすぎてはいないかと思うことがあるので、もしHeatherが一旦冷静になれとのメッセージを送っているのだとしたら、その点には賛成である。本書のある意味「凡庸な皇帝」としてのユスティニアヌス像は、一部の研究者が描くような悪玉としてのユスティニアヌスや幾分偏向気味の歴史像に対してバランスをとるのに役立つだろうし、歴史の解釈にはとり得る幅があるのであって様々な見地から批判的な検討を重ねていかねばならないという当たり前のことをあらためて思い出させてもくれるだろう――まあ古代末期研究者は偏っているのはHeatherの方だと反論してくるかもしれないが。

だが本書にはひっかかる点もあったので、そちらも説明しておこう。評者は三点の疑問を覚えた。第一に、ローマ帝国衰亡に関して2005年の書で示された考え方が、本書でもほぼそのまま踏襲されていることである。Heatherは4世紀の諸改革によって立て直されたローマ帝国の内側に関してはかなり積極的に評価しており、帝国の内部には衰亡につながる要素を見出していない。衰退の原因は異民族の流入である。ローマ側は国境地帯の異民族を外交や軍事的圧力を通じてコントロールすることに概ね成功していた。だが、未知の新勢力が更なる外部より到来するとバランスは崩れる。2005年の書ではこれはフン族であり、2018年の書ではアヴァール族やアラブ人である。彼らが出現すると、これまで国境地帯にとどまっていた異民族が圧迫を受け、玉突き的な人口移動とそれに伴う領土の縮小が生じる。領土の縮小は税収と資源の減少につながり、帝国の危機対応能力は低下の一途をたどる。こうしてローマ帝国は衰退していくのである。だが逆に言うと、未知の新勢力が出現せず、資源の確保と分配ができている限り、ローマ帝国は安泰だったということになる。ユスティニアヌスの時代には帝国の資源動員能力を致命的に損なわせる事態は生じておらず、危険な新勢力はユスティニアヌス以後の時代に出現した。したがって、ユスティニアヌスのローマ帝国は衰退などしていなかったことになる。だが、6世紀のローマ帝国が内部構造の面で4世紀の時点から変化せず機能を保っていたとみなしてよいのだろうか。2018年の本書では、ローマ帝国内部の行政や財政の問題にはほとんど触れられていないため、この点が十分に検証されているとは言い難い。また、2005年の書と同様、本当にローマ帝国の内部には衰退を招くような要因はなかったのかという点には、やはり議論の余地がある。これと関連して問題となるのが、異民族への評価である。

二つ目の気になった点は、Heatherがヴァンダル族や東ゴート族といった異民族を固定的にイメージしていることである。Heatherは、ベリサリオスが対峙したヴァンダル族や東ゴート族の兵力を仮説的に算出している。ヴァンダル軍の場合は2万から2万5000、東ゴート軍の場合は3万である。そしてこれらのほとんどは、彼らが北アフリカやイタリアにやって来た時点で有していた兵力の直接の子孫だと考えている。これだと、ヴァンダル族や東ゴート族といった集団の枠組みは、入植と建国の時点から再征服戦争期までほとんど変化し

ていないことになる。Heather は「ヴァンダル族」とか「東ゴート族」といった集団がローマ領への移住と建国の過程で形成されたものであることを認めている。だがこの集団は、建国期に一旦形成されると、それ以後はほぼ同じで変化と無縁の存在のようにイメージされているのである。また Heather は、再征服戦争成功の一因を東ローマの戦術的有利に見出している。6 世紀の東ローマ軍は弓騎兵が重要な役割を担う野戦機動軍を主力としていたのに対し、ヴァンダル族や東ゴート族は槍騎兵による突撃に頼るという 5 世紀に広まった戦い方をいまだに採用していたため、正面切っての戦闘ではかなわなかった、というのである。これが戦術史的に正しいのかどうかはわからないが、この説明があることによって、本書の中の異民族はきわめて固定的な集団という印象が強まる。建国時の異民族と再征服戦争時の異民族は、質的にも数的にもほとんど同じなのである。

ヴァンダル族や東ゴート族は旧西ローマ領に一旦定着すると、それ以後、変化をとめてしまったかのようだ。Heather は彼らのことを「特権的植民地エリート」にたとえている。だが、仮に異民族と土着のローマ系住民との通婚が一切なく、異民族は少数派の支配者として閉鎖的な集団を形成していたとしても、ここまで変化が生じないと想定してよいものだろうか。Heather の描く異民族の姿は、歴史的変化から遊離したものであるかのような印象を受ける。そしてこのことは Heather の衰亡論における立場とも関わってくる。本書を読めば、なぜユスティニアヌスの再征服戦争が予想外に上首尾に運んだのかは理解できる。ヴァンダル族や東ゴート族は東帝国以上に資源面での制約が大きく、元々戦闘要員の数が限られている上に、一度失えばそれを補充することもほぼ不可能だからである。だが、Heather はローマ衰退の原因を異民族の流入に見出しているのである。それなのに、実際の異民族は変化に乏しく資源を欠き、一度敗れればそれまでの存在というのでは、説明に矛盾が生じるのではないか[4)]。ローマと異民族の関係についてはもう少し別の説明が必要なのかもしれない。

第三点は、ヴァンダル族や東ゴート族だけでなく、東帝国の「ローマ人」もまた動きのない存在になっていることである。ニカの乱や教義問題との関連ではいくらか出番があるものの、ユスティニアヌスの臣民たちもとにかく無条件にそこに存在しているかのようであり、ヴァンダル族や東ゴート族と同様、固定的で変化に乏しい。というより、そもそも存在感が希薄といってよいかもしれない。だがユスティニアヌスの再征服戦争は東帝国の臣民たちに何の心理的影響も及ぼさなかったのだろうか。ユスティニアヌスの再征服政策はたしかに場当たり的対応の産物だったのかもしれない。だが少なくともプロパガンダ上は、正統信仰によって支えられた、異端者と野蛮人からローマ人の正統なる領土を奪還する戦いである。こうしたプロパガンダを受け取るのは臣民のごく一部かもしれないが、このようなプロパガンダが東帝国の「ローマ人らしさ」に何らかの影響を与えた可能性はやはりあると思う。こうした東帝国側の自己認識の問題について言及があれば本書はさらに興味深いものになっただろうし、この時代のローマ帝国を文明論の観点から議論することにもつながったのではないか。本書は「古代世界における戦争と文明」シリーズの一冊であるため、「文明」につい

ての踏み込みがない点は惜しまれるところである。

本書は後期ローマ帝国の生命力を強調するとともに、英雄でも悪玉でもない姿を描くという点でユスティニアヌスの評価を下方修正するという代物である。気になる点はいくつかあるが、歴史書としては堅実な筆致で、論の運びもわかりやすい。だがHeatherは挑戦的な主張を行なってもいる。①ユスティニアヌスの時代に至ってなおローマ帝国は活力を保っていた。②ユスティニアヌスは元々西方旧領の再征服など考えていなかった。③ユスティニアヌスの再征服戦争は東帝国の国力を消耗させたりはしなかった。いずれも一般的なイメージとは正反対である。私たちはこうしたHeatherの主張をどう受けとめるべきだろうか。そしてその後、どのような議論を提示していくべきだろうか。

註

1）南川高志（2008）『西洋古典学研究』56、142～145頁。

2）南川高志編（2009）「ローマ帝国の「衰亡」とは何か」『西洋史学』234、61～73頁。

3）たとえばP. Amory（1997）, *People and Identity in Ostrogothic Italy, 489-554*, Cambridge; M. Maas（ed.）（2005）, *The Cambridge Companion to the Age of Justinian*, Cambridge; J. J. O'Donnell（2009）, *The Ruin of the Roman Empire*, London; J. J. Arnold（2014）, *Theodoric and the Roman Imperial Restoration*, Cambridge。

4）2005年の著書にもこれと同じ問題があることを井上文則が指摘している。前掲（註2）、南川編（2009）66頁。